「終局目標」をつねに念頭におき……

……ゼムストヴォと政治的自由との関係の問題は、改良と革命の関係についての一般的問題の特殊な場合である。そしてわれわれは、この特殊の場合において、流行のベルンシュタイン理論の狭さと愚劣さをあますところなく見ることができる。この理論は、革命的闘争を改良のための闘争でおき換え、（たとえば、ベルヂャーエフ氏の口を借りて）「進歩の原理は、良くなればなるほどそれだけ良い、ということである」と宣言している。一般的形態においては、この原理はその反対の原理――悪くなればなるほどそれだけ良い――と同じようにまちがっている。もちろん、革命家はけっして改良のための闘争を拒否しないだろうし、たとえ重要でない、部分的な敵の陣地であっても、**もし**その陣地が革命家の攻撃をつよめ、完全な勝利を容易にする**なら**、それを占領することを拒否しないだろう。だが、彼らはまた、敵自身が、攻撃者を分裂させていっそうたやすく粉砕するために、一定の陣地をゆずりわたすばあいもしばしばあることを、けっしてわすれないであろう。彼らは、「終局目標」をつねに念頭におき、「運動」の一歩一歩と改良の一つ一つを全般的な革命闘争の見地から評価してはじめて、運動が誤った歩みを取ったり、恥ずべき誤謬に陥らないように保障することができるということをけっしてわすれないであろう。

第五巻 P65　ゼムストヴォの迫害者たちと自由主義のハンニバルたち

１９０１年６月に執筆

１９０１年１２月に雑誌『ザリャー』第２－３号にはじめて発表

ポイント

革命家はけっして改良のための闘争を拒否しない。「終局目標」をつねに念頭におき、「運動」の一歩一歩と改良の一つ一つが、たとえ重要でない、部分的な敵の陣地であっても、もしその陣地が革命家の攻撃をつよめ、完全な勝利を容易にするなら、それを占領することを拒否しない。 革命家は、全般的な革命闘争の見地から評価してはじめて、運動が誤った歩みを取ったり、恥ずべき誤謬に陥らないように保障することができるということをけっしてわすれてはならない。